

家事と事務

とくしゅう

日常の行為に

たずさえている無言のことは

ことばにならない 身ぶりや

一日も休むことなく つづく

生きるための さまざまなこと

家事と事務

埃をほらい 暮らしを整え

とんとんとんと 書類をそろえ

これらに助けられてきた

これらを繰り返かえしてきた

疲れた手に そつと 触れる

ていねいに そつと

今日を畳む

私の創り出す所

山口 諒子

暗い中目を覚まし、洗たっきのボタンを押しに行く。

家の前は、お寺で高い建物はなく東の空が見える。

オレンジの太陽。

子ども達を起こし、朝の時間が忙しく始まる。

洗たっきがピーピーと鳴る、10年の付き合いに愛想も尽きる。『またや…』フタを締め直すと動きだす。白いご飯に梅干しを用意して

『はい、運んでやー』

子ども達も次々自分のご飯を運ぶ。洗たっきが、ピーピーと鳴る、『はぁー』片寄りを直すと脱水にかかる。今度こそ、洗濯終わりのピー。

いってらっしゃーいと子を送りだしたら、幼児の帽子、ジャンパー、電気、と私も出掛ける準備をする。

あっ!ゴミや!また鍵を開け、ゴミを取りに行く。

『もう!』と言って幼児と笑う。保育園に最後の送り出し。

パーゲーとハイタッチがあいさつ、これを忘れると泣いて離れない。

どんなに遅刻でも心を一つにして、パーゲー。

ココルームに来たら、冷蔵庫チェックする。前の日の、晩ご飯のおかずが残ってたら萌える。

これを使ってお昼ご飯を創り出す。ふふふ、ビックリご飯。おっちゃんと言葉を喋りながら、出来

上がっていくご飯、でも喋りすぎたら何してるかわからなくなり、野菜やザルや鍋が溢れる。↑



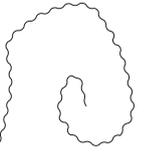
→電話が鳴り、不慣れな対応する。宅配便のサイン。気を取り戻しキッチンに立つ。おっちゃんとしゃべる。おっちゃんと言葉を喋りながら、出来

ご飯と一緒に食べてくれるスタッフやお客さんの、反応が楽しい。お皿が空になると私の創作意欲が湧いてくる。あれ?事務がほとんどない。

山口 諒子 1980年生まれ 3人の子を持つお母さん。2011年念願だったカポエラの道が開け lagoa do abaete japao に入り子と一緒にカポエリスタとなる。翌年春から、縁があってディジュリドゥもマイペースに始める。2012年～、夏フラーっとココルームに引き寄せられてカフェの方で動かせてもらう。この地域の不思議な日常を楽しみ、なんとも言えない温かさをもらいながら変態の磨きをかけている。

普通のすばらしさ

山口洋典



事務方と事務局

事務と家事について言葉を綴ろうとしたとき、事務については3つくらいの観点が浮かんだのだが、いざ家事について何が語れるのだろうか、と悩んでしまった。今、結婚生活を始めてから4回の記念日を迎えてきているのだが、年々、後ろめたさと感謝の念だけが高まってきているように思う。当初は実行のために有言を重ねてきたものの、この頃は実行できないことへの反省から無言を貫く傾向にある。そんな自分をよそに、こうした家事を「手伝うね」という態度には、最早、家事は自分（ここでは男、と言い換えてもよいだろう）の役割ではないという前提を垣間見ることができそうだ。

かつて「運動とは事務である」と言った市川房江さんが、女性の参政権を獲得する牽引役となったところの一つ、事務を巡る視点が見出せる。何らかの活動において、目標に到達せしめることで、目的を達成するために事務が要であるとする、この短い金言は、とりわけ関西では大阪ボランティア協会の早瀬昇さんが積極的に用いたこともあって、よく知られている。早瀬さんは、月刊ボランティア（現在の『vol』大阪ボランティア協会・刊）の367号（2001年7・8月合併号）において、この「運動とは事務なり」という言葉を、田中真紀子外務大臣（当時）の「事務方」という発言を引き合いに出し、事務を担う事務局の存在に焦点を充て、事務局が主導して取り組む活動（社会運動）の落とし穴を指摘した。この原稿はウェブで閲覧可能（<http://www.osakavol.org/getuvol/mvi2001/mvi3671.html>）なので、また、原文を通読いただきたいが、特に結語の「日常の事務が活動の土台になるとの自負を失わず、仲間の頑張りを引き出す」ことが大切と締めくくられた部分は、数々の「事務局」さらには「事務局長」なる役職をいただいていた私に、深い省察を促してくれる。



このように、事務と言えば運動、という点を思い浮かべた私は、運動という言葉から英語の「GYM（ジム）」を連想してしまった。単なる言葉遊びなのだが、そこに無理矢理でも意味を見いだして「事務とは（スポーツの）ジムである」こんな風に捉えてみたい。すなわち、自らの基礎体力を付ける場や機会ではないか、ということである。そして、その基礎体力とは、何らかの作業の処理能力ではなく、むしろ、日常生活の中で覚える喜怒哀楽にいかに向き合っていくか、心身両面にまつわる素養ではなからうか。

影法師という仕事人

事務にあたっては「能力」よりも「素養」が重要となるということ、往年の名作と称される『機動戦士ガンダム』における「ジム（GM）」という「モビルスーツ（搭乗型の兵器）」の存在から紐解いてみたい。この作品においてジムは高性能なモビルスーツ「ガンダム」の量産型として、スペックダウンが計られたモデルである。いわゆる一般兵の出動にも用いられ、一連の闘いを支えたジムの存在は、一見、目立たず、そして一機一機の峻別はつきにくい。しかし、ここに、事務の担い手に通じる観点、さらには家事にも重ねられる視点を見出せるだろう。

かつて、哲学者のイヴァン・イリイチは「シャドウ・ワーク」という概念により、社会の日の目を浴びる人たちには、それを支える影法師のような存在が不可欠であることを指摘した。これを援用するならば、『機動戦士ガンダム』における「ジム」は「ガンダム」を先頭とした戦闘を支える「シャドウ・ワーク」、またボランティア団体やNGO・NPOにおける「事務局」は構造的な問題の只中に置かれた当事者の人々を支える「シャドウ・ワーク」、と捉えられるだろう。その際、「ガンダム」よりも力量は劣る「ジム」が集団的な行動を通して、「敵」との闘いを征していったように、社会運動における事務局のスタッフも、個々の絶対的な力量よりも、集団としての相乗効果がもたらされるように、いかに連帯し協調できるかが、目標に到達できるか否かを左右する。ここに、事務では「力量」よりも「素養」が重要となることの論拠を見いだすことができよう。

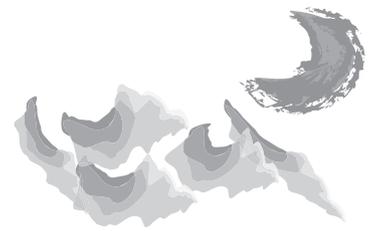
世の中において、最も顕著な「シャドウ・ワーク」は家事である。社会運動における「シャドウ・ワーク」が事務であり、そして事務においては力量よりも素養が重要であるとするなら、家事においても個々の力量よりもそれにまつわる人々の素養が重要となろう。冒頭の内省を引き合いに出すならば、改めて家事とは家事という作業を担う人へののみ、何かを求めて委ねるものではなく、その作業が何気なく担われることによって淡々と送ることができる普通の生活に対して、その恩恵にあずかっている人、全体が敬意を抱かねばならないだろう。男女が区別されることのない普通選挙という成果を導いた、女性参政権運動の牽引役、市川房枝さんの金言をもとに、作業の請負人を、れっきとした仕事人として捉えていかねばという決意を繰り返しつつ、洗い場に立つ妻の姿を想像しながら、稿を綴ることになろう。

山口洋典

1975年静岡県磐田市出身。2006年より大阪・天王寺の浄土宗應徳院にて、僧侶とNPOの事務局長の立場からお寺と社会の関係づくりを担う。2011年度より立命館大学のハイブリッド生活。

洗濯

植田裕子



洗濯機が、水と空気をかき混ぜる音が好きだ。幼い頃、共働きの両親にかわって、一家の洗濯をしてくれていたのは祖父であり、そのあとを引き継いだのが私だった。(と、いってもいま思えば、半分以上は両親がしてくれていたのだと思う) 二層式の洗濯機から全自動の洗濯機に変わった時に、その使い方を一番に覚えたのも私だった。「電源ボタンを押して、表示を見て洗剤を入れ、スタートボタンを押すこと」機械音痴な家族でもできるように、私なりの説明書を書き、洗濯機の横に貼ったことを覚えている。

小学生の私にとって、一番大切だったのは、いかに美しく、それらを干せるかということだった。たこ足の左右は必ず同じもの、ハンガーにかかる服は丈の順番に並べる。ハンガーや服の向きはもちろん統一されていて、それらはもちろん等間隔に干されなければならない。家族に、美しく干せた洗濯物を見せるとは、誇らしい気持ちになったものだった。

中高生の私は、洗濯機をまわし、毎日のようにその前で歌っていた。お風呂が隣にあるため声がよく響き、鏡があるため自分の口の開け方も見ることができる、洗濯機の前は歌の練習にはもってこいの心踊る場所だった。洗濯機に足を乗っけてストレッチもした。洗濯機の中をじっとみつめる日もあった。

大学に入り、ひとり暮らしをはじめた時には、洗濯物の量が少なくなり、洗濯機を毎日まわさないですむことに驚いた。この頃からは、美しく干した洗濯物を見せる相手がいなくなったので、とにかく速が一番になった。ひとり、思考が止まってしまうような時に助けてくれたのも洗濯だった。とにかくこの場をかきまわしてほしい、と、ベランダにある洗濯機をまわし、窓を開けたままにし、外の気配を聞いた。

いま、冬の洗濯というのは、またちょっと違う。現在の住まいは洗濯を干すところが寒いので、洗濯は家に帰って一連の流れでやってしまわない限り、ずぼらな私には億劫で仕方がない。

家に帰りついたら、そのまま洗濯機をまわし、お風呂を洗い、湯船にお湯をためつつ入りながら、本を読む。ピーーと洗濯終了の音が鳴ると同時にお風呂をあがり、体があたたかいうちに干してしまう。洗濯は、冷え性の私がちゃんとお風呂に長くつかるための口実を作ってくれている。

最近やっとできた洗濯まわりの改革がある。一度着たけれどもう一度着てから洗濯をしたい服の固定の置き場をつくったことと、干した服をそのまま畳んで仕舞えるように、物干のすぐ近くに衣装ケースを持ってきたこと。面倒くさがりやの私は、私が面倒くさがりやのままでもなんとかするように考えることが好きだ。こつこつと片付けをする前に、「これはものごとの流れそのものに原因があるに違いない」と根本を変えたい。がらりと変える仕組みを思いつくまで、とりあえずの片付けができないのが困りどころだ。

洗濯と言っても、洗濯板をつかうわけでもなく、機械がほとんど全自動で行ってくれるものである。「洗濯」というキーワードだけで1200字も書けはしないだろう、と思いつつ、家事と事務について他に書けることもなく、この文章を書きはじめた。すると案外、次から次へと洗濯をめぐる言葉が出てくる。よく考えてみたら、この27年の人生のなかで、暮らしを続けるために私が途切れず取り組んできた(とは大げさだが)こと、それは洗濯以外に思いあたらないのだった。

植田裕子

これまで、彦根、柏、取手、那須塩原、西成などで暮らしてきました。西日の入る部屋が好きでした。本棚について考えることも好きです。部屋も頭の中も、整理は下手です。コルムに来て2年が経ち、また春が来るのがうれしいです。

✪ 報告書 できました。 ✪

「こね」詩集のついで OCA! 報告書.

まちでつながる
2011→2012
ちよと、生きやすくなる。

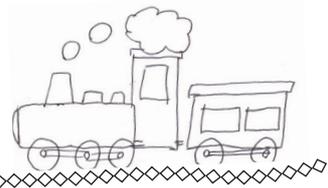


金崎の
高取いもと
アツシに
ついでの論文集。

お問い合わせは、
info@cocoroom.org
まで。

このあと、金崎大の
報告書もできるよ!!

母とモノたちのものがたり ようこ



薄々気付いていた。母が相当な量のモノを家に溜め込んでいることを——。父が保険会社に勤めていたことから、子ども時代は2、3年おきに会社が決めた場所に引っ越すという生活だった。引っ越しは家族にとって本当に大変な一大事業だったが、今思えばモノを整理するいい機会ではあったかもしれない。私や弟の成長とともに段ボールの数は増えたが、それでも引き出しや押し入れに収め切ることができた。私が高校2年になった年から父は単身赴任をするようになった。父が転勤先で社宅住まいを続ける一方、両親は生まれ育った関西に人生における夢のひとつであったろう家建てた。以来、母はずっとその家で暮らしてきた。父が相変わらず転勤を繰り返す間も、弟が大学入学と同時に下宿を始めた時も、私が結婚して家を出た後も。

この1、2年の間に、母が時折こぼすようになった。父から「荷物を片付けろ」としよっちゅう言われること。自分でも片付けなければと思うが、どこからどう片付ければいいのかわからないこと。片付けなければと思うほどに胸が苦しくなり、つらいこと。父が手伝うと言うのだが、「こんなにためこんで」と責められるのが目に見えているから絶対に父には見られたくないということ。母がゆっくりと、でも確実に老いていることを実感していた私は、母一人で片付けるのは無理だと思った。「私を手伝うから、一緒にやろう」と言うと、「ありがとう」と喜びながら、「来てもらう前にちょっと片付けな」と冗談のようなことを真顔で言うのだった。

そんなやりとりを何度かした後、母の荷物整理は始まった。まずはキッチン。久しぶりに実家を訪れ、正直驚いた。積み上げられたモノ、モノ、モノ。何が積み上がっているのかも見ただけではわからない。母が私の様子をうかがっているような気がしたので、私はさりげない表情を意識してつくった。そして積み上がったモノに手をつけた。古い新聞や雑誌の切り抜き、紙袋、お菓子の空き箱、包装紙、洋服の型紙、電話や電気の明細書、粗品と書かれた箱・いろいろなモノが脈絡なく積み重なっていた。ケーキの空き箱、とくに賞味期限の切れた紅茶やコーヒー、新品の小皿セットが入った箱。餅を焼く網が新品のまま、なぜか3つもあった。最初のうちこそ一つひとつ母に「これはどうする?」と確認していたが、すぐにやめた。9割以上がいらぬモノ、早く言えばゴミなのだ。その要不要を延々と母に判断させるということは、私が責める言葉を口にしなくとも「ゴミだらけ」ということを繰り返し確認することになる。それが母にとって楽しいわけがない。母が言うとおりに、父がこの作業をやれば必ず怒り出すだろう。

私は自分が捨てないほうがいいと思うモノ以外はとにかくゴミ袋に突っ込んでいった。それはすぐに「何もかもいらぬ」という気持ちになり、あっという間にパンパンにふくらんだ袋がいくつもできた。

特に驚いたのは、買ったままの状態でも積まれた雑誌だった。本屋の名前が印刷されたポリエチレンの手提げに入った状態で次から次へと出てきた。雑誌を取り出すと、レシートが挟まれている。

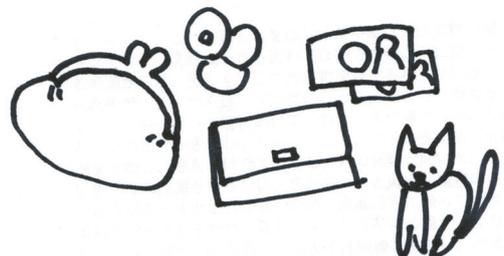
買ったきり、開いてもないのだ。「血液がサラサラになる食事」「体が若返るストレッチ」「夏を涼しく過ごすワンピース特集」……特集のタイトルがなんだかむなし。最初はそれも選り分けていたが、すべて捨てることにした。雑誌は次々と出る。「今の」母の関心をひく内容のものもいくらかでも出てくる。また買えばいいのだ。そして今の今まで思い出しもしなかったモノは、最初から存在していなかったのと同じなのだ。レジで支払いをすませ自分のモノになった時点で、母は満足したのだろう。その段階で雑誌の役割はある意味終わったのだろう。

あっという間に3時間が過ぎた。かなりのゴミを出したが、見た目にはあまり変わらない。先は長いと覚悟した。だからこそ楽しむ気持ちをもとうと思った。財布も3つ4つと出てきた。小銭もお札も入っている。「おかあさん、またお宝が出てきたよ!」と言うと、母は「あれー、こんなとこにあったの」「これは〇〇さんが海外旅行で買ってきてくれたの。上等なのよ」となつかしそうに言う。「いやあ、1万5千円も入ってるわ」と喜び、「私は昔から大金は入らないけど、小金には困らないと言われるの」と得意げに言う。いやいや、それは元々あなたのお金ですからという心のツッコミを隠して「ほんまやねえ。よかったね」と応じると、母はそのお金を封筒に入れて「今日のお駄賃」と私にくれた。ありがたくいただくことにする。新渡戸稲造の5千円札を見たのは久しぶりだ。

ちなみにこの日、父は出かけていた。正確にいうと、父が出かける日に片付けをすることを母と決めた。大量のゴミ袋は母が外の物置に隠した。玄関先などに置いて父の目に触れれば、嫌みを言われるからと母は言う。一段落ついて、母とお茶をのむ。のんびりと、近所に新しくできた店や親戚の近況などを聞く。しずかに過ぎてゆく時間。母の表情は穏やかだ。こんな時間が必要なのだと思う。カマンのバザーに出してもらったことにした焼き網や時計などを、これまた粗品などで集まったらいいエコバッグに詰めて腰をあげる。何度も「ありがとう」を繰り返す母に手を振り、私は電車に乗って自分の家に帰る。冬の夕焼けに見とれながら、少しずつでも母と一緒にあの積み重なったモノたちを捨てていこうと考える。風がよく通る家で、好きな読書をゆっくりと楽しませてあげたいと思う。

ようこ

寺田町で娘と暮らし、大正の職場に通い、時々新今宮で途中下車してココルームでほっこり。天満と福島と西九条にお気に入りの居酒屋があります。最近、野田にもいいお店を見つけました。ピバ! 環状線。ライターとしていろんな人のお話を聞いて、書いてます。



包丁を持たない君に告ぐ 茂木秀之

一年ほど住んだ瀬戸内海の島での生活は、すなわち家事の生活だった。

朝起きて畑仕事をする。一段落したら洗濯、少し掃除。料理して昼食を済ませるとヘトヘトになっているので一眠り。軒下に干してある野菜や果物の手入れをしてから、必要があれば商店街に行行って買い物。夕飯をつくって食べる、と一日が終わる。

他に何をやる余裕もなかった。家事だけしているとどうなるかという、現金が手に入らない。

畑をしているといっても知れたもので、日々食べる野菜のせいぜい3分の1を自給できる程度。米や調味料は買わなければならない。家賃はタダだったが、一軒家を一人で手入れするのは大変な仕事だった。水は井戸が使えたがガスや灯油はお金で買うし、携帯電話もどうしても手放せなかった。なんだかんで月々3万円ぐらいはお金がないとやっていけない。しかし丁寧に家事をしていると賃金労働をする時間などなかった。

生きるために最も必要であるはずのことに専念していると現金を得られずに死ぬ。あらためてそのことを突きつけられたショックは極まりなく、鎌を片手にツバメ舞う空のもと打ち震えた春の終わり。毎晩布団に入るとどうやって生き延びようかとうなされ、目が覚めるとベーシックインカム、ベーシックインカム、とうわ言のようにつぶやく毎日であった。

コクルームの日々の仕事のなかで何に時間を費やしているかといったら、圧倒的に家事と事務だろう。

スペースの維持は家事そのものだと言える。こまめな掃除や物の整理が欠かせないし、していると際限がない。コクルームの場合は毎度の食事づくりもある。食材の管理・買い出しもそのような手間である。様々なプロジェクトに取り組みながらこれを毎日こなすのは正直かなりしんどい。

その様々なプロジェクトの影には膨大な事務作業がある。水面下でこんなにも足をかいていなければ泳ぐことができないのかと、時折茫然とするほどである。

米を研ぎ、電卓を叩き、雑巾を搾っては新着メールを開く（未読が二桁になると体調が悪くなるのでなるべくこまめに。）ヘトヘトになった身体とともにいつも残るのは、お金の心配である。島暮しと何も変わっていないではないか、戦慄！季節は移ろい、鎌をペンに持ち替えても、果たして敵の姿は違わなかった。

ところで企画や意思決定に関わらない立場を一般に事務方と呼ぶ。企画や意思決定に、関わらない。なるほど、そのようなことだけをしているから生活が立ちゆかないのだと言われればもっともであるような気もする。しかしよく考えてみると企画や意思決定をしなければ生きていけないというのもずいぶんおかしな話である。僕たちは突き詰めればただ生きていきたいだけのはずで、人が生きてほしいと願うときにすることはまず食べるとか住むとかいうことではないのか。そういうことをインスタントに済ませたり他人に任せきりにした人間たちが意思決定する世界なんて、まったく願ひ下げだ。

今日も狭いキッチンの電子炊飯器から立ち上る湯気に、か細いながらも生きることの基礎を垣間見ながら、島で芋を干した庭の空気の澄み方を思い出してはその確かさに焦がれて少しだけ涙を

溜め、それでも今はここで生きるのだ、と歯を食いしばる。

プラスチックを食べながら毎日意思決定に勤しむ人たちよ、ともかくここに来て、一緒にごはんを食べないか。話はそれからだ。

茂木秀之

1983年生まれ、木登りや泥遊びと無縁に育ち、311を機に自然豊かな土地に移るもギャフンと言われるがまあまあ健闘したと思う。起き抜けにベーシックインカム、と本当につぶやいていた。夜中、生口島全域に轟く音量で『ヘッド博士の世界塔』をかけていた件については反省しています。

家事と事務、この大事さを分かっているのに

上田假奈代

「政治は事務だ」

市川房枝のことば。つづきを書こうと書類に名前をつけたにも関わらず、そのあと数時間一文字も進むことがない。ひっきりなしの用事、用事、用事。さて、と座ると、通りすがりの人に救急車を呼んでくれと頼まれる。ともかく椅子をだし座ってもらう。いつもの場所に電話機がない。ともかくケータイで119をする。「呼びましたから待ってくださいね」と声をかける。急にその人はビニール袋の中からごそごそと毛布を取り出し「使って。洗濯してや」と言う。「洗濯するわ」。野宿の人に毛布をもらうのは気が引けるが、「重いから」と言うので受け取る。電話機を探し出し、いつもの場所に戻す。しばらくするとおじさんの姿がみえない。代わりに別のおっちゃんが座っていて、「救急車で行ったわ」と言う。横で「これ、いくらですか」お兄ちゃんがバザーの服をまけてくれと言う。「はいはい。」包んで渡す。おっちゃんは「(商品を)勝手に持っていかれへんよう見張っといたる」と言う。もらった毛布はすでになくなっていた。夕暮れが近い。

だいたい毎日がこんな調子で、気がつけば外は暗くなっていて、日付が変わっていて、何もかもが積み残されて追いつかない。

事務も家事も基本はすぐ使う場所に物の居場所をさだめ、名前をつけ、使ったものは元の場所に戻すこと。そうすれば、ちょっとは余裕も生まれるだろう。事務も家事もシンプルに。そう、仕事も家も、ちいさい規模がいいなあ、と思う。ぱぱっと掃除ができて、見渡して意識を整えることができれば尚よい。ジャングルのように植物が生い茂り、おもしろい動物などもいるとよいと思うが、埃のついた葉を一枚いちまい拭いたり、毛や糞尿の始末など、いろいろお世話することを思うと、小さな部屋で数鉢の植物と数人の人間と暮らすので充分である。大切にできる範囲をわけもつこと。政治の事務として、基本は同じだろう。

それにしても、今日の反省は、電話機をいつもの場所に戻していなかったことだ。

上田假奈代

年度末！1年に一度やってくる。事務と家事の本領発揮の季節である。緊張と焦りとウッカリの日々よ！体力つけとこ。唇に歌を。こころに花を。

「支援ハウス路木」 管理人日誌

記入者：渡邊義邦

H 2 4 年 1 2 月 1 日

たくさん頂いたパンが冷凍してあって、それを二個電子レンジでチンして温める。玉出で買った焼き鳥も冷凍してあったのでそれも1串レンジでチンする。ティファールで湯を沸かし、レトルトの味噌汁をいれる。パン、焼き鳥、味噌汁で朝食を済ます。使った食器はそのままにしておく。洗濯はコインランドリー。冬は服がかさむので、大きなゴミ袋2袋分くらいになる。洗濯機は一回200円。ひとつでは間に合わないので2つで400円。乾燥機が30分で300円。一回の洗濯に700円。お金の節約の為に週に一回まとめてする。週末に洗濯に行けなかったのが洗濯物かごに山盛りに積まれている。その山を越さないと部屋の外へは出ることができない。そしてその山へ行くには録音機器に繋がる配線のトラップをくぐり抜けなければならない。

数々の困難をくぐり抜け、長靴を履いて部屋を出る。自室の入り口を出るとそこがマンションの管理人室になっている。そこを抜けると一階の廊下。廊下を出て掃除用具置き場から水やり用のホースのリールを取り出し水道につなぐ。マンションの共用部分に置いてある鉢植えに丁寧に水をやっていく。南天、紫陽花、アロエ、ミント。名前の知らない観葉植物がこの時期に鮮やかな赤い花を咲かせている。しっかりと時間をかける。面している道路にも水を撒く。途中、出かけていく住人の方々とあいさつをする。あいさつは気持ちがいい。デイサービスのお迎えの車が到着する。ヘルパーさん達の笑顔にも元気をもらう。今日は陽が出ていて比較的温かいのでゴミ捨て場の掃除もする。マンション用の大きなゴミ箱。中のゴミを一旦全部取り出してデッキブラシで磨く。汚れがどんどん落ちていく。長靴をすごいと思う。すっきりした気持ちで管理人室に戻る。靴を履き変えて、月初めなのでTさんのお給料を作る。Tさんは洋服のお医者さん。すそあげのお店をしている。その月々の売上の計算、お給料の支払いも私の業務に含まれる。勤務開始からこの作業は三回目。作業の全体をある程度把握して以前よりは効率的に動けるようになった。徒歩一分、すそあげの店舗に行きTさんにお給料と明細を渡す。領収書にサインを頂いて、ほっとして戻る。管理人室の扉に「ごはんを食べに行ってきます」という張り紙をして13時、ココルームへ行く。

おいしいごはんが出来上がっている。みんなでテーブルを囲んで食べて、食器を洗う。食器を洗い終わると「いってきます。」と言って戻ってくる。

引き続きお給料を作る。今度はマンションの清掃業務をしてくださっているOさんのお給料。入力作業の後に明細を印刷してまた徒歩一分、Oさんの金銭管理をしているNPOの事務所に行く。お金と明細を渡して、領収書を書いてもらって戻ってくる。そして、その二人分の給料に関する書類をまとめて会計事務所にメールで送る。

次はココルームのスケジュールを作成する。管理人室の前を通る時に少しお話をしてくださる方々とお話ししながら作業を進める。このスケジュールの作業には時間がかかるから無理には急がない。できるところまでやって18:30、管理人室のシャッターを閉めてココルームへ戻る。

おいしいおいしいごはんが出来上がっている。みんなで食べて、食器を洗う。洗い終わるとカマン！メディアセンターを片付ける。大量の衣類、雑貨を仕舞い込む。ココルームを片付ける。日々の清掃。21時頃に就業。「いつもごはんをつくってもらっていてばかりで申し訳ないな」と帰宅。

管理人室を通り抜けて部屋の扉を開ける。部屋が焼き鳥のタレの匂いで満たされている。配線に引っかかり、本棚を倒す。



渡邊義邦

1984年生まれ。2012年10月にココルームスタッフとなる。えんぴつは右手で持って、ボールは左足で蹴ります。毎朝の水やりの時間が好きです。「わたなべよしくに」として歌を歌っています。

2013年4月から支援ハウス路木専従スタッフに。

ちりもつもれば

小手川望

うっかりと風邪を引いてしまい、3日ほど寝込んでしまってその後なかなか治らない。家で寝ていてもなにもできないので、家事が見る間にたまっていく。洗濯物はたまる、ほこりはつもの、整理整頓はますます行き届かない。そんな家の中で寝て過ごさねばならず、ストレスも比例してたまっていく。

家事というと、わたしは両親共働きで、大学時代にはそれなりに家事を引き受けていたので、「どうして家事労働は外で働くのと違ってお金がもらえずに低くみられているのだろう」ということが気になっていた。新聞のDV被害の記事で「誰のおかげで暮らしていけるとかと思ってんだ」と罵倒される専業主婦の記事を読んでひっかかっていた。経済学部で労働価値説（という学説があるのですね）について勉強しても、説明できない。結局そのことをテーマにして大学院に進み、なんとか社会思想史の先生に指導教官になっていただき、歴史的に近代のイギリスとドイツで専業主婦につながるような女性像の形成について研究することになった。

家事労働にかんする先行論文を読んでいると、必ず言及されている論文が「シャドウ・ワーク」（イヴァン・イリイチ）というものだった。あまりに何回も目にするので、興味深くなってきて、自分でも手に入れて読んでみると、非常に面白いことが書いてあった。近代になって産業社会の中で、お金になる労働と、それを支えるための「陰の労働」シャドウ・ワークが生じたことが書かれて、その「陰の労働」は、夫がお金を稼ぐ仕事に就くことを支えている専業主婦がおこなう家事労働のほか、「受験勉強」「通勤時間」「おじいさんが孫と遊んであげること」「余暇にレジャーを楽しむこと」などがあげられていた。

「受験勉強」が労働？ でもたしかに、自分の意志とは関係なく、学歴のためにかなり時間を割かなくてはならず、その上だから「人のための仕事」とは評価されない。「シャドウ・ワーク」に関しては、フェミニズムがたくさん反応していたと思うが、もっと幅広いひとたちに関係する考え方だと思った。

わたし（たち）は、お金をもらって働いて生活することを当たり前のことだと思っているし、よりよい仕事をえるために教育を受けること、仕事をする間にこどもの面倒を見てもらうこと、休

みの間に、自分のかせいだお金をよりよい使い道で使って、楽しい時間を過ごすこともまた、当たり前のように生活している。

そのように設計された社会の中で生きていくことは、人間が自立して、自分自身として存在することから遠ざけられていることなのではないか、というのがイリイチの問題提起なのではないのかなー、と思う。

生まれたときからそうだったことを、疑ったり、反駁したり、というのはなかなか難しい。だけれども、不思議なことだが、コルルームで仕事をしていると、どこまでがお金をもらっている活動なのか、どこまでが自分のいきいきとした生活のための活動なのか、分けるのは難しいし、どこが境界なのかよくわからないくらい溶け合っている。たしかに仕事のはずなだけども、めんどくさい書式の書類と格闘したりしながら、みんなで食べるごはんをつくり、洗い物をし、こどもと一緒に遊んだり、おっちゃんたちと世間話をする。詩を詠んで、笑って、歌を歌い、泣いたり、絵を描いたり。寄付されたバザーの品物をとりにいき、お金の計算をする。いかに安く今日の食材を買うために自転車走らせながら、社会と関わるアートって何だろうとうんうん考えてよくわからない。

大学院に行った後、会社勤めを経験し、こどもを産んだ。こどもが産まれたらやるのが山ほどあって、賃労働とか家事労働とか考えている間もないくらい。連続して2時間しか寝れない生活が4ヶ月も続いて、他にこんな思いをして生活することはないのではないかと。職場だったら超過酷現場だが、育児にはお金も何ももらえないのだよ。（今だったら児童手当がありますね）だんだんと、わたしのなかでは「家事労働」は「お金のもらえない低くみられる労働」から、ひとつひとつの行為が、いかに生活を気持ちよく送るかのための試みとなっていった。昔から変わらず、整理整頓、掃除は苦手だけど、なるべく掃除の時間を取るようになった。

家事は、継続しつづける「生」に流れている時間を感じるための、拍子のようなものかもしれない。ちりもつもれば、つもっては困るのだけれども、人生は長い。家事は続く。

小手川望

埼玉県出身。2011年の大地震と原発事故をきっかけに、現在9歳の娘とともに大阪に移住。コルルームにお世話になりつつ避難生活を送り、2012年よりスタッフ。



釜ヶ崎で終末期に向き合う

「孤独に応答する孤独」

シンポジウム

8月14日（水）13:00～15:30

会場：西成西成市民館（予定）

釜ヶ崎で終末期を迎える。日雇い労働者から高齢者のまちとなりつつある地域で、異分野の団体や研究者とディスカッションし、活動の発表を行います。

登壇者：山形孝夫（宗教人類学者）、西川勝（臨床哲学）ほか

釜ヶ崎にくらす、釜ヶ崎で学ぶ

釜ヶ崎芸術大学

2013年第2期、開校します

※ 詳しいことが決まったら、ご案内します。

お楽しみに…！

週に一回、木曜日に「自主ゼミ」開催中。

講師の推薦図書、美術「美しいってなんだろう」、天文学「眠れなくなる宇宙のはなし」、感情「脱暴力を呼びかける」、哲学「ためらいの看護」などなどをみんなで輪読しています。

EVENT PICK UP



ココルーム、カマン!メディアセンターでは、日々さまざまなゆるやかなイベント・勉強会・相談会がおこなわれています。お気軽にご参加ください。くわしくは、<http://www.cocoroom.org> をご覧ください。

釜ヶ崎氷志会 かまがさきひょうしゅうかい

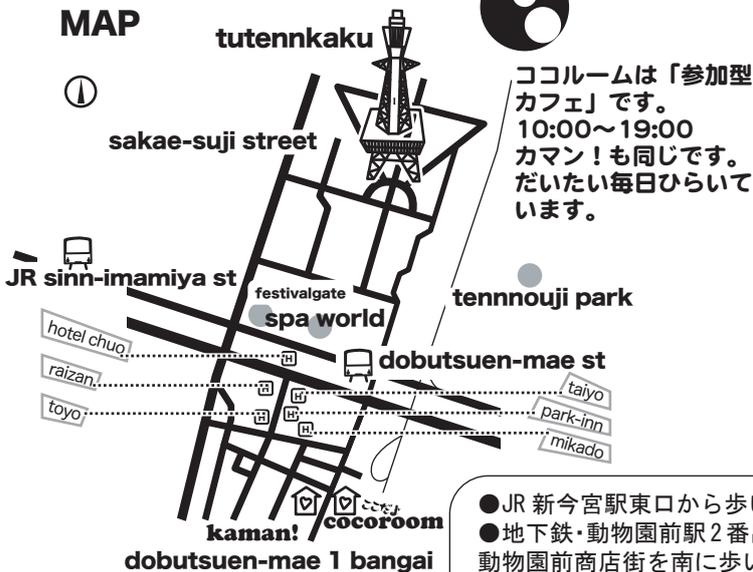
月に一回、ココルームに集まってみんなで楽しく俳句をつくっていきます。参加者の年齢は9歳から100歳まで。正式な句会のやりかたにのっとり、投句、選句、披講とすすめ、つくった俳句は、近江八幡市の俳句結社氷志会の選句の対象にもなります。

2013年3月の作品の一部を紹介します

春風と北風小僧交代だ	ニヤニヤ
雪の雛桜田門外鮮血す	暢春
久々の実家で菜の花スパゲティ	ゆう湖
春一番とびこむならば那智の滝	こて
家計にも吹いてほしいよ春一番	万葉
阪神がピーク迎えるオープン戦	もぎ
雛祭り一番目当ては雛あられ	まる
初刈りで冷たさを守るハンチング	ねこのおっちゃん
りゅうりゅうと眼口も開けぬ吹雪かな	忠太郎



MAP



ココルームは「参加型カフェ」です。10:00~19:00 カマン!も同じです。だいたい毎日ひらいています。

- JR 新今宮駅東口から歩いて7分。
- 地下鉄・動物園前駅2番出口から、動物園前商店街を南に歩いて3分。商店街に面しています。



特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋 (ココルーム)
Non-profit organization The Room for Full of Voice, Words, and Hearts (Cocoroom)

インフォショップ・カフェ ココルーム

557-0001 大阪市西成区山王 1-15-11

tel&fax.06-6636-1612(+81)

info@cocoroom.org

<http://www.cocoroom.org>

The Information Shop & Cafe COCOROOM

1-15-11 Sannoh, Nishinari-ku, Osaka, JAPAN 557-0001

まちでつながる。ちょっと生きやすくなる。

かまがさきの街で 体を動かしたり、詩をつくったり、暮らしや気持ちについて 気になっていることを おしゃべりしたりします。

えんがわけんこう相談会

血压をはかり、お口のケアを学びます

会場: カマン!メディアセンター前

日時: 毎月第三水曜日 14:00~15:00

6月19日(水)、7月17日(水)、8月21日(水)、9月18日(水)、10月16日(水)、11月20日(水)

えんがわおしゃべり相談会

会場: カマン!メディアセンター2F (大阪市西成区太子 1-11-6)

5月~11月まで全9回 参加費: 無料

講師: 尾久土正己 (天文学者)、倉田めば (薬物依存回復支援団体「Freedom」代表)、尾角光美 (一般社団法人リヴオン代表)、西川勝 (看護師) 他

助成: ファイザープログラム

リラックス体操と瞑想の会

フェルデンクライスとチベット音楽瞑想

会場: 西成市民館 2階和室

講師: 小手川望、花の宮祐三子

毎月2回。5月17日、31日、6月7日、14日

金曜日 14:00 ~ 16:00 です。

助成: 大阪コミュニティ財団

「家事と事務」ぼえ犬通信トーク

一生きていく上でひつようなことのお話

ゲスト: 社納葉子 (ライター)

6月22日(土) 14:00 ~ 16:00

ニカイ!文化センター (カマン!メディアセンターの2F)

会費: カンパ制 (経済的にしんどい方は無料でけっこうです)

お問い合わせ: 06-6636-1612 (ココルーム)

■ココルームでは、活動のための寄付をつのっています。

三井住友銀行 天王寺駅前支店 普通1585265
トクテヒエイリカヅウホウシニコエトコトバココロハヤ

郵便振替 記号 01090-5-48059
cocoroom代表 ウエダカナヨ

カマン!メディアセンター

557-0002 大阪市西成区太子 1-11-6

info@kama-media.org <http://www.kama-media.org>

KAMAN! Media Center

1-11-6 Taishi, Nishinari-ku, Osaka, JAPAN 557-0002